

シ ラ バ ス
（ 講 義 概 要 ）

科目名	知の理論		科目コード	KLCE0101L	
担当教員	川山 竜二		単位	2 単位	
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	土曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	必修

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、「知の理論（「知識についての知識」についての基本的な知識の捉え方や学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味する知の体系の総称をいう）」の内容と社会的・学問的・教育的な布置を履修者が理解することである。「知の理論」とは一体何かという問いから始まり、あらゆる「知」とは何かを考察していく。また、他方で「知の理論」は、教科を超えた思考を養成するための教育プログラムとして初等教育から高等教育、さらにはリカレント教育まで注目されている。「知の理論」を教育体系に組み込むための方法についても検討していきたい。

本授業の到達目標は、1) 「知の理論」を理解し、「知の理論」が置かれている社会的・学問的・教育的布置を自らで把握することができるようになること、2) 「知の理論」を理解し布置を把握することで、理論と実践を融合し実践の理論を構想できるようになるための知見を獲得すること、3) 国際バカロレアなど新たな教育プログラムに位置づけるための知見を獲得することである。

この講義は、第一に、実務家教員等を目指し専門職教育に従事しようとする者、第二に、「知の理論」を理解し国際バカロレアなど新しい教育に役立てようとする者を履修者として想定して構成される。

授業計画

第1週（1講） イントロダクション 「知の理論」とは何か

本授業の授業計画について共有し、「知の理論」がどのような文脈で用いられているのかについて講義する。

第2週（2・3講） 社会的文脈のなかの「知の理論」

「知の理論」をとりまく、社会的状況と教育状況について講義し、これからの社会において「知の理論」の重要性と教育への適応可能性について論じる。

第3週（4・5講） 知の理論と知の種類

知を探究する領域として「科学論（科学哲学）」や「認識論」がある。こうした知を探究する領域と「知の理論」がどのように関わっているのかを講義する。また、「知の理論」で扱う「知の種類」について解説する。

第4週（6・7講） 知の方法論とクリティカル・シンキング

「知の理論」における「知の方法論」について解説する。くわえて、「知の理論」とクリティカル・シンキングの関係について検討する。

第5週（8・9講） 歴史・宗教・芸術の知識

「知の理論」の知識の種類にある、歴史・宗教・芸術の知識を取り上げ、当該種類の知の特徴とどのように歴史・宗教・芸術の知識が形成されるのかを検討する。

第6週（10・11講） 土着的知識・科学的知識・実践的知識とは何が違うのか

「知の理論」の知識の種類を用いながら、「土着的知識」、「科学的知識」、「実践的知識」を取り上げ、それらの知の特徴と知の生成方法について検討する。

第7週（12・13講） 「知の理論」と教育プログラム

「知の理論」を教育プログラムに実装する方法と教育プログラムとしてのどのような評価方法が可能であるのかを講義する。

第8週（14・15講） 実社会に「知の理論」はどのように活用できるのか

それぞれの履修者が、実社会において「知の理論」で習得する能力や知見がどのように活用するのかを口頭発表・討論してもらう。

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。

上記授業の目的・到達目標を達成するため、本授業は担当教員による講義とディスカッションを交えて授業することを想定している。最終週の第8週では、口頭発表を行う。

授業外の課題

授業外の課題として、それぞれの履修者に与えられた課題への取り組み、必要な関連資料などの精読をおこなうこと。特に第8週のための発表準備は確実におこなうこと。

教科書・参考書

指定教科書なし。また、授業中に適宜、参照図書を紹介する。例は以下の通り。

- ・ Heydorn & Jesudason, 2016, 『TOK（知の理論）を解読する～教科を超えた知識の探究～』株式会社Z会.
- ・ Bastian & Kitching, 2016, 『セオリー・オブ・ナレッジ—世界が認めた「知の理論」』ピアソン・ジャパン.
- ・ Richard van de Lagemaat, 2014, *Theory of Knowledge for the IB Diploma*, Cambridge University Press.

評価方法

1. 授業ごとにその場でコメントを書く「ミニットペーパー」を提出してもらう。コメントとは、自分自身の意見とそう考える理由・根拠のこと（60%）。
2. 最終授業回の口頭発表（40%）。

その他の重要事項

土曜日A週は、本履修生を優先したオフィスアワーとする。本時間もふくめて、別の時間にオフィスアワーを求めるときはメールまたは学内のLMSで事前に予約すること。

科目名	組織論			科目コード	ICPA0105L
担当教員	坂本 文武			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	水 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、組織というものの構成要素や構造的課題を理解することで、理念による経営を推進する担当者として「組織は誰のものなのか」「理念実現のためにどのような組織が必要なのか」、そして、「社内外のステークホルダーとともに組織を変えるには、どうするのか」といった問いに答えることにある。

広報は、社内情報を社外に広く発信するだけが職務の本質ではない。社内外のステークホルダーとの双方向で創発的な関係性を構築し、新たな組織のあり方を模索する「コミュニケーション・デザイナー」としての役割を担うことができる。組織というものの本質やジレンマを理解することで、ステークホルダーとのコミュニケーションを経営の意思決定に利活用でき、組織の社会適応性を高める機能を効果的に発揮できると考える。

なお、本授業で扱う組織は、営利企業を主たる対象とする。ただし、組織の本質を理解するために、敢えて非営利組織や行政機構との共通点や相違点を確認しながら討議する計画である。

本授業の到達目標は、履修者が組織を分析する基本的な視点を獲得するとともに、現代社会において組織をデザインする際に重視すべき点について、自らの考えを述べるようになることにある。

授業計画

第1週（1講）：企業と社会の関係性—**unsocial**なビジネスは誰が生み出しているのか？

キーワード：ソーシャル・ビジネス、企業と社会論、CSR

第2週（2・3講）：組織における人間モデルの変遷と組織構造のデザイン—組織は人をどう扱ってきたか？

キーワード：組織論基礎、組織構造、組織論における人間モデル

第3週（4・5講）：企業の基本と株式会社制度の課題—企業は「責任」を取り得る主体なのか？

キーワード：法人の神学論争、株式会社観、責任

第4週（6・7講）：国内外の営利法人ガバナンス観—企業は誰が統治する存在なのか？

キーワード：コーポレート・ガバナンス（国内、主要先進国）

第5週（8・9講）：企業価値創出へのまなざし—企業は何によって評価されるべきなのか？

キーワード：企業価値評価、財務・非財務価値、利益の意味

第6週（10・11講）：組織学習と企業文化の理解—企業の環境適応能力を高めるには？

キーワード：組織学習、企業文化、理念浸透

第7週 (12・13講) : ダイバーシティと組織変革—企業は自ら変革ができるのか?

キーワード: ダイバーシティ、組織変革

第8週 (14・15講) : 総括—結局、企業は誰のものなのか?

キーワード: 組織デザイン

ゲスト講師とともに考える予定 (企業の組織デザイン担当者)

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、基礎知識の習得を狙いとする講義と、そこから派生する本質的な問いに対するディスカッションを通して構成する。

なお、重点的に取り扱う具体的なテーマについては、履修者の関心を踏まえて調整していく。

授業外の課題

授業外の課題として、授業終了後の事後学習を強く推奨する。その際に特定した疑問や議論したいテーマについては、次回授業の冒頭で時間を確保する計画。また、次回講義資料を予め LMS (教務システム) 上にアップするので、一読して参加することを促したい。また、最終レポート課題の完成に向けた作業を求める。

教科書・参考書

教科書は特に指定しない。

参考図書は、毎回授業で配布するレジюмеに明記する。

評価方法

- ① 毎回授業で行うディスカッションへの参加、貢献度を評価する。
- ② 最終レポート課題 (約 3,000 文字) の提出を求める。

以上、① (40%)、② (60%) の総合評価により成績を評価する。

その他の重要事項

初回の授業で、オフィス・アワーについて説明する。

※ 本授業は、「広報・情報研究科」「持続可能な次世代人材育成を探究する大学院教育プログラム」の共通科目である。

科目名	教育学概論			科目コード	AEPA1103L
担当教員	廣谷 貴明			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	木曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、教育学の理論や教育に関わる思想、歴史、近年の状況を理解し、教育の意義や時代に応じた教育方法、及びその課題を考察することを通じて、学校、企業、地域社会等における人間対人間の教育で応用可能な知識や能力を涵養することである。

「教育」とは誰しもが経験する行為であり、意識的にでも、無意識的にでも行われているものである。しかし「教育」とは何であり、なぜ人間に必要なのだろうか？そしてどのような教育方法が求められ、どのような効果があるのだろうか？「教育」と一言と言っても考えることは多々ある。本授業では理論的な側面から、教育に関する諸現象を解説する。

本授業では次の3点を到達目標として設定する。

- ① 人間に教育が必要な理由、意義を説明できる
- ② 状況に応じた効果的な教育方法を説明できる
- ③ 授業で学んだスキルをもとに自らの教育を省察し、実践にうつすことができる。

以上の3点を達成することで、授業終了後には様々な教育現場（学校、大学、企業、家庭等）で理論に基づいた、専門的な教育実践ができるようになる。ひいては時代の変化に柔軟に対応した上での次世代を担う人材育成のスキルを身に付けられる。

授業計画

第1週（1講）：オリエンテーション—教育を学び、問うということはどういうことか？—

キーワード：教育学、複眼的思考、人材育成

第2週（2・3講）：教育の基本原則—教育とは何か？なぜ必要なのか？—

キーワード：教育哲学、生理的早産、人間関係論、認知論

第3週（4・5講）：日本における教育の理念と発展—なぜ日本で学校教育は生まれたのか？—

キーワード：教育の機会均等、単線型学校教育制度、比較教育制度論

第4週（6・7講）：教育が行われる場所の多様性—教育は学校だけのものか？—

キーワード：生涯学習、リカレント教育、家庭教育、学習社会論

第5週（8・9講）：人間の発達—人生で出会う壁は何か？その克服のための具体的支援は何か？—

キーワード：愛着理論、認知発達段階説、心理社会的発達理論

第6週（10・11講）：教育方法の基本原則—教育方法の根源にある思想は何か？効果的な方法は何か？—

キーワード：カリキュラム、問題解決学習、コミュニケーション

第7週（12・13講）：教育の効果と評価—どのような効果が得られ、何を評価するのか？—

キーワード：人的資本理論、シグナリング理論、完全習得理論

第8週（14・15講）：近年の教育をめぐる社会情勢の変化—今後の社会で何が教育に求められるか？—

キーワード：国際化社会、情報化社会、教育実践論

<p>授業の進め方と方法</p>
<p>本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。上記目的・到達目標を達成するため、各授業の初めに授業内容に応じたワークを提示する。それらの課題に回答し、ディスカッション（30分）を踏まえたうえで、講義形式の授業に移行する（60分）。なお、ワークには完全な正解はないので、自由な発想に基づく回答を求める。</p>
<p>授業外の課題</p>
<p>各授業終了後に、次回授業に向けて読むべき論文やニュースを学内のLMS（学習管理システム）にアップする。授業の最初のワークではアップされた論文やニュースをもとにした課題を提示するため、全て読んでから授業に参加すること。</p>
<p>教科書・参考書</p>
<p>本授業では教科書は指定しない。参考書は下記の通り。また、各授業の最後により深く学びたい人のための文献を紹介し、必要に応じて配布する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相澤伸幸，2015，『教育学の基礎と展開 [第3版]』ナカニシヤ出版。 ・大崎素史・坂本辰朗・井手華奈子・牛田伸一・井上伸良，2016，『人間の教育を求めて—教育学概論—』学文社。 ・佐藤学，1996，『教育方法学』岩波書店。 ・沼田裕之・増渕幸男編，2009，『教育学21の問い』福村出版。
<p>評価方法</p>
<p>①ワークに関する議論への参加、貢献度（40%） ②ワークに関する自身の考え、及びその根拠、理由をまとめたミニットペーパーの提出（20%） ③最終レポートの提出（40%） 以上、3つの観点から総合的に評価する。</p>
<p>その他の重要事項</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の初回にオフィスアワーについて説明する。 ・各授業終了後に学内のLMS（学習管理システム）上に授業で使用した資料をアップする。 ・遅刻や欠席をする場合は、学内のLMS（学習管理システム）またはメール等を通じて事前に連絡すること。 ・授業内容に関して疑問点や不明点があれば、遠慮なく担当教員まで連絡すること。

科目名	教学マネジメントの理論と実践			科目コード	KLCE0104L
担当教員	富井 久義			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	火曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

教学マネジメントとは、大学において教育目的を達成するために行う管理運営を指す、比較的新しい用語である。この用語は、大学教育の質保証をめぐる議論において導き出されたものであり、授業やカリキュラムに対する教育機関の責任を求める要望の高まりを反映している。教学マネジメントをめぐることは、教育機関が提供するプログラムが、教育目的の達成のためにどのように一貫性を保つべきなのかについての理論と方法が検討されている。そしてその議論は、大学や公教育の分野のみならず、広く教育プログラムを提供する機関に適用しうる発想だといえる。

そこで本授業では、大学をめぐる教学マネジメントに関する議論を実践に即して読み解き、それに基づく実践的な事例を検討することで、教育プログラムの質保証を教育機関の水準で担保する手法についての検討を行う。教学マネジメントをめぐる議論の広がりやアクターの立場を考慮して内在的に読み解くことを通じて、あるべき実践的な教学マネジメントの手法を履修者相互に検討することが、本授業の目的である。

本授業の到達目標は次の通りである。

- 1 教学マネジメントをめぐる主要な方法論について理解し、説明することができる。
- 2 教学マネジメントの方法論を実践の水準に落とし込む方策について、批判的に検討することができる。
- 3 教学マネジメントの方法論をもちいて、自身が取り組む教育／学習活動に関する教育プログラムを設計することができる。

授業計画

第1週（1講）	: 授業はだれのものか？—イントロダクション
第2週（2・3講）	: 教学マネジメントとは何か—「教学マネジメント指針」を読み解く
第3週（4・5講）	: 教学マネジメントの方法論①3 ポリシーに基づく教育課程の編成
第4週（6・7講）	: 教学マネジメントの方法論②PDCA サイクルを回すことは可能か
第5週（8・9講）	: 教学マネジメントをめぐる多様なアクターとその利害
第6週（10・11講）	: 教学マネジメントの実践事例
第7週（12・13講）	: 教学マネジメントの実践①3 ポリシーを考える
第8週（14・15講）	: 教学マネジメントの実践②カリキュラムを編成する

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。第7・8週は、履修者による発表とそれに基づく討論を行う。毎回の授業終了時には、各回の学習内容と自身の意見・その根拠を記入する、ミニットペーパーの提出を求める。

授業外の課題

第7・8週での発表準備を課す。

教科書・参考書

教科書は指定しない。初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。

評価方法	
・ 毎回の授業終了時のミニットペーパーの内容	40%
・ 授業への貢献度（文献講読の発表分担、ディスカッションへの参加度）	30%
・ 第7週・第8週での発表内容	30%
*具体的な評価基準は初回授業時に説明する。	
その他の重要事項	
相談等が必要な場合は、事前にメール等で連絡をすること。	

科目名	インストラクショナル・デザイン			科目コード	KLCE0105S
担当教員	伴野 崇生			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	月曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	演習	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、履修者が「インストラクショナル・デザイン (ID)」に関連する理論やモデルについて理解するとともに、それをを用いた効果的な学習や研修のデザインを実現するための方法を身につけることにある。

上記目的を達成するため、本授業では、ID に基づく効果的な知識の普及・活用を実現するための実践的な方法について検討する。授業の実施にあたっては、ID に関連する理論についての解説とディスカッションを中心に進行し、適宜ワークショップによる実践的な授業を取り入れることで、知識と方法の定着を促す。さらに、あらゆる知識修得の文脈で注目される ID の理論と方法について、歴史的変遷を踏まえつつ、知識基盤社会の成熟に伴う今後の展開についても検討する。

授業計画

- 第1週 (1 講)：「いい教育」「優れた教育実践」像を見つめ直す・インストラクショナル・デザイン(ID)とは
- 第2週 (2 講)：ID の理解と活用①：9 教授事象、ID 第一原理、メーガーの 3 つの質問等
(3 講)：ID の理解と活用②：TOTE モデル、アンドラゴジー、学校学習の時間モデル等
- 第3週 (4 講)：ID の理解と活用③：学習成果 5 分類、4 段階評価モデル、ARCS モデル、ADDIE モデル等
(5 講)：学習理論の変遷と協同・協働的な学びのデザイン
- 第4週 (6 講)：発表 —— ID を通して振り返る授業実践・授業案
(7 講)：ID と学習環境のデザイン —— ICT の利用を中心に
- 第5週 (8 講)：ID と学習評価のデザイン —— 多様な学習観・学力観、目標と方法と評価の連動
(9 講)：授業デザイン演習 —— 授業実践・授業案の改善、再設計
- 第6週 (10 講)：授業における教師の役割と教師に求められる資質・能力
(11 講)：マイクロティーチング実践演習
- 第7週 (12 講)：マイクロティーチング実践の録画を通したリフレクション
(13 講)：ID とシラバス・コース・カリキュラム・プログラムのデザイン
- 第8週 (14 講)：まとめ① —— 「私はこのコースを通じて何を学んだのか」
(15 講)：まとめ② —— 「私は教育者として何を指すか。ID をどう活用するのか」

授業の進め方と方法

本授業は、2 講 (90 分×2) 連続で実施する。授業は発表を中心に行うが、発表に必要な基礎的な知識に関しては講義を行い、教員からの話題提供に基づいてクラス内でディスカッションを行う。発表やマイクロティーチングにかかる時間や実施形態はクラスの履修者数を見て調整を行う。

授業外の課題

発表準備、マイクロティーチング準備、レポート課題など。

教科書・参考書
<p>教科書は指定しない。初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。受講者自身がより自律的な学習者となっていくために、以下の書籍は手元において参照することを推奨する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 鈴木克明・美馬のゆり編著, 2018, 『学習設計マニュアル:「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房.
評価方法
<ol style="list-style-type: none"> 1. 毎回の授業終了時に書くコメントシート（ミニツツペーパー） 20% 2. レポート①（授業実践報告または授業計画案と ID とクラス内での議論に基づく改善計画案） 20% 3. レポート②（マイクロティーチングの実施計画作成・実施・振り返り） 20% 4. レポート③（「このコースを通じて何を学んだのか」または「私が本講義を担当するなら —— ID に基づく提案」） 20% 5. 授業貢献度（ディスカッションへの参加度・貢献度、グループワーク等での積極性） 20%
その他の重要事項
<p>クラスでは毎回、様々なアクティブラーニングの手法を用いて授業を進める。積極的な参加を期待する。受講にあたり、何か特別な配慮を必要とする場合にはメール等で担当者に連絡し、相談をすること。</p>

科目名	アンドラゴジー			科目コード	KLCE0106L
担当教員	伴野 崇生			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	火曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

アンドラゴジーとは、アメリカの教育学者ノールズ(Malcolm S. Knowles)が体系化した成人学習理論・成人教育学のことである。「教育」といった際、その対象としては幼児・児童・生徒が想起されがちであるが、成人もまた学習の主体であり、生涯を通じて学び続けることができる存在である。

成人教育・学習についてはノールズ以外にも様々な研究者がその特性や学習支援の方法等について研究を行ってきた。本授業では、そのような成人の教育と学習に関する様々な視点を学び、さらにクラス内での議論を通じて授業内容を「自分ごと」にしていく中で（受講者自身も成人学習者である）、知識の定着および理解の促進を図りつつ、学習者・教育者としての成長を目指す。

アンドラゴジーは社会構造が変化し続け、さらには平均寿命も伸び続けている中で、教育者にとって、成人の教育と学習は当然理解していなければならない領域である。地域社会も変化し、日本国内においても多言語多文化化がより一層進む中で、成人がどのように変容し、適応し、言語文化的「他者」との間でいかによりよい関係を構築していけるかも重要な課題となってきた。本授業では成人学習者が地域社会で直面する多様な課題についても取り上げる。

本授業の到達目標は下記の通りである。

1. 成人教育・学習の特性について理解し、説明できる。
2. 生涯学習としての成人教育について考え、高齢者を含むあらゆる年齢層の成人学習者に対応することができる。
3. 地域社会の変化に対応した成人のあり方について考え、その教育についても考えることができる。
4. 成人学習者である自分自身の学習を成人教育の理論によって位置付け、自らの学びを促進できる。

授業計画

第1週（1講）：成人教育・学習とは — 子どもに対する教育、社会教育、生涯教育等との相違と類似

第2週（2講）：成人学習者とアンドラゴジー — ノールズの理論を中心に

（3講）：成人教育とリカレント教育・大学機関における生涯教育 — 受講者自身を事例として

第3週（4講）：成人教育と生涯発達 — 人生100年時代における発達とエイジング

（5講）：成人学習者と学習のプロセス — 記憶・認知・経験に関する理論を中心に

第4週（6講）：成人学習者と自己決定学習 — 自律した学び手となる／育てる

（7講）：成人学習者と創造社会の学びと教育 — 「つくることで学ぶ」という視点

第5週（8講）：成人学習者と地域社会・コミュニティ — 学びと学びあいの場としての地域とコミュニティ

（9講）：成人教育・学習とボランティア — 学びとコミュニティ参加の機会としてのボランティア

第6週（10講）：成人教育と異文化間コミュニケーション教育 — 言語文化的「他者」との接触と学び

（11講）：成人教育と日本における多文化共生 — 地域社会の変容と成人の学び

第7週（12講）：成人教育とマジョリティ特権 — 「差別」という視点をこえて

（13講）：高齢者の学習・教育 — 高齢者の様々なニーズと教育

<p>第8週（14講）：成人教育・学習と自己実現 ― 人間的欲求と成就価値 （15講）：まとめ ― 「成人学習者としての私と成人教育」について考える</p>
<p>授業の進め方と方法</p> <p>本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。毎回の教員からの話題提供（授業内容）に基づいてクラス内でディスカッションを行う。授業終了時に毎回コメントシート（ミニツツペーパー）を記入し、第2回以降は毎回授業開始時に小テストを実施する。小テストの内容は、その前の回の授業内容から基本的な知識を出題するものとする。</p>
<p>授業外の課題</p> <p>特になし。</p>
<p>教科書・参考書</p> <p>教科書は指定しない。初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。</p>
<p>評価方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 毎回の授業終了時に書くコメントシート（ミニツツペーパー） 45% 2. 毎回の授業開始時の小テスト（毎回、その前の回の授業内容に関する知識確認のための小テストを行う） 15% 3. 学期末レポート 25% (教師評価 15%、自己評価 10%) 4. 授業貢献度（ディスカッションへの参加度・貢献度、グループワーク等での積極性） 15%
<p>その他の重要事項</p> <p>クラスでは毎回、様々なアクティブラーニングの手法を用いて授業を進める。積極的な参加を期待する。受講にあたり、何か特別な配慮を必要とする場合にはメール等で担当者に連絡し、相談をすること。</p>

科目名	実務家教員概説			科目コード	KLCE0107S
担当教員	荒木啓史、篠田雅人ほか（オムニバス方式）			単位	4単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	土曜 A・B
年間開講数	1回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

高度に複雑化した現代社会では、学術の領域においては実社会で直面する事象に即した学習の機会が求められ、実務の領域においては最先端の科学的な知見に基づいたイノベーションを促進することが期待される。こうしたなか、今後の教育のあらたな地平を切り拓く存在として期待されるのが実務家教員である。実務家教員には、実務の領域と学術の領域の双方の知見をつなぎ、みずから「実践の理論」を構築してそれを伝達していくことや、「実践の理論」の構築をうながしていくことが期待されている。そうした実務家教員になるには、みずから実務の領域において培ってきた経験知＝実務能力にくわえて、それらを効果的に教育できるようになるための教育指導力や、実務の現場に結びついた経験知を言語化・体系化することで実践の理論を構築する研究能力が求められる。

本授業は、実務能力・教育指導力・研究能力を兼ね備えた実務家教員がなぜ社会的に求められているのかを解説したうえで、履修者みずからが有する実務能力を踏まえたかたちで、教育指導力、研究能力を養うことを目的としている。具体的には、授業のシラバスの作成や模擬授業等の実践をまじえつつ効果的な教育指導方法を学習し、また、論文のプロット作成をつうじて実務家教員としての研究を遂行する方法を学ぶ。

本授業の到達目標は、次の4つである。

- 1 実務家教員をめぐる政策・社会動向や実務家教員の実践事例を理解し、説明することができる。
- 2 みずからの実務能力を踏まえた授業科目を考え、授業計画を構成してシラバスを書くことができる。
- 3 みずから計画した授業科目について、対象として想定する学生に即した授業を実施できる。
- 4 みずからが専門とする実務領域に関わる論文のプロットを論理的に構成することができる。

授業計画

第1週（1・2講）：ガイダンス・実務家教員とは何か

——実務家教員を取り巻く社会的状況と養成する能力【担当教員・川山竜二】

第2週（3・4講）：教員調書と実績——教員個人調書の作成とキャリアの棚卸し

【担当教員・橋本純次（広報・情報研究科専任講師）】

第3週（5・6講）：実践と理論の融合——実務経験の言語化・体系化による実践の理論の構築方法

【担当教員・川山竜二】

第4週（7・8講）：実践講義法——受講生を惹きつけるための実践的な講義方法論

【担当教員・廣政愁一】

第5週（9・10講）：シラバス作成の基礎——授業計画の作成方法

【担当教員・篠田雅人（先端教育研究所専任講師）】

第6週（11・12講）：教授法の基礎——授業計画にふさわしい教授法・指導法

【担当教員・荒木啓史（先端教育研究所准教授）】

第7週（13・14講）：教材研究——授業計画にふさわしい教材選択・教材作成

【担当教員・石崎友規（常磐大学人間科学部准教授）】

第8週（15講）：高等教育論——高等教育についての基礎知識

（16講）：成人教育論——成人に対する教育方法についての解説【担当教員・川山竜二】

<p>第9週（17・18講）：論文執筆の基礎——学術論文執筆のための基礎知識 【担当教員・荒木啓史】</p> <p>第10週（19・20講）：ファシリテーション論——アクティブ・ラーニングの理解と実践方法論 【担当教員・目黒茜（筑波大学大学院）】</p> <p>第11週（21・22講）：研究指導法——個別相談・指導において受講生の能力を引き出す方法 【担当教員・富井久義】</p> <p>第12週（23・24講）：成績評価論——成績評価の考え方と具体的な評価方法 【担当教員・篠田雅人】</p> <p>第13週（25・26講）：実務家教員のキャリアパス——実務家教員としての心構えとキャリア論 【担当教員・青山忠靖（事業構想大学院大学事業構想研究科特任教授）、四元正弘（広報・情報研究科教授）】</p> <p>第14週（27・28講）：論文執筆演習——履修者が作成した論文プロットの報告と討論 【担当教員・荒木啓史、篠田雅人、川山竜二、橋本純次、富井久義、ほか】</p> <p>第15週（29・30講）：模擬授業——履修者の授業計画に即した模擬授業の実践と評価 【担当教員・荒木啓史、篠田雅人、川山竜二、橋本純次、富井久義、ほか】</p>								
<p>授業の進め方と方法</p> <p>各週の授業は、第1週から第13週については、各回の担当教員による講義と、履修者が（履修者どうしのディスカッションをまじえつつ）課題に取り組む演習の組み合わせで進行する。第14週は、あらかじめ履修者が作成した論文のプロットについての報告と討論を、教員ひとりと履修者数名からなるグループにわかれた演習形式でおこなう。第15週は、履修者がひとりあたり20分間の模擬授業をおこない、教員や他の履修者がその評価とフィードバックをおこなう。毎回の授業終了時にはミニットペーパーの提出を求める。</p> <p>なお本授業は、先端教育研究所が開設する「第5期実務家教員養成課程」と同時開講である。授業はA週・B週連続で開講し、10:00-13:00を授業時間とする。第1週も含めて2講連続（10:00-13:00）で開催し、第15週を8月22日（土）に開講するなど日程が変則的であることから、履修にあたっては、「第5期 実務家教員養成課程スケジュール（2020年4月開講）」も確認すること。また、本授業計画に示した日程と並行して、講演形式の授業5回と、研究会形式の授業2回が実施される予定だが、本授業の履修者の参加は任意とする。</p>								
<p>授業外の課題</p> <p>授業で取り組む課題である教員個人調査、シラバス、論文のプロットを完成し、提出すること。とくに論文のプロットは、第14週の報告・討論で使うので確実にこなうこと。各課題の提出期限は適宜授業内で示す。また、第15週の模擬授業の準備も各自進めること。</p>								
<p>教科書・参考書</p> <p>教科書は指定しない。参考書は授業内で適宜紹介する。</p>								
<p>評価方法</p> <table border="0"> <tr> <td>・ミニットペーパーの記入内容</td> <td>20%</td> <td>・模擬授業の完成度</td> <td>30%</td> </tr> <tr> <td>・作成したシラバスの完成度</td> <td>30%</td> <td>・論文プロットの完成度</td> <td>20%</td> </tr> </table>	・ミニットペーパーの記入内容	20%	・模擬授業の完成度	30%	・作成したシラバスの完成度	30%	・論文プロットの完成度	20%
・ミニットペーパーの記入内容	20%	・模擬授業の完成度	30%					
・作成したシラバスの完成度	30%	・論文プロットの完成度	20%					
<p>その他の重要事項</p> <p>各担当教員のオフィスアワーは原則授業終了時とする。</p> <p>その他の相談は、実務家養成課程担当教員（荒木・篠田）をつうじておこなうこと。</p>								

科目名	知識と大学			科目コード	KLCE0108L
担当教員	蔵田 實			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	土曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択
授業概要（目的・到達目標）					
<p>大学の知のありかたをめぐっては、大学教員や管理経営者にとどまらず、文部科学省や経済団体など、多様なアクターが議論を活発に交わしている。ここでは、グローバル化やユニバーサル化による環境変化、人口減少による財政難、学生の変容、質保証の観点など、多くの課題が取り沙汰されている。本授業では、大学の知をめぐって取り上げられる諸問題の概要を学び、大学と知のあるべき姿を論じられるようにすることを目的とする。あわせて、この課題検討にあたって必要な知識となる大学の歴史の変遷や海外の事例、専門職大学制度などの最新動向を学ぶ。</p> <p>本授業の到達目標は、次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学と知をめぐる主要な課題の論点を理解し、説明できる。 2. 大学と知のあるべき姿について、自身の見解を論じることができる。 3. 大学と知のあるべき姿の実現に向けて、自身が取り組むべき課題について、実現可能な構想を立てることができる。 					
授業計画					
<p>第1週（1講） 大学と知—イントロダクション</p> <p>第2週（2・3講） 高等教育の変容と現状の課題</p> <p>第3週（4・5講） IR(Institutional Research)と FD(Faculty Development)・SD(Staff Development)</p> <p>第4週（6・7講） 高大接続と初年時教育</p> <p>第5週（8・9講） 高等教育政策と教育改革</p> <p>第6週（10・11講） 高等教育機関のガバナンスとマネジメント</p> <p>第7週（12・13講） 高等教育の質保証と外部評価</p> <p>第8週（14・15講） これからの高等教育を考える</p>					
授業の進め方と方法					
<p>上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とともにアクティブ・ラーニングの観点から履修者間のディスカッションを行う。毎回の授業終了時には、各回の学習内容と自らの意見をまとめて記述するミニットペーパーの提出を課す。</p>					
授業外の課題					
<p>授業外の課題として、前時の授業で予習内容を提示するので、学習課題について事前に論点を整理しておく。</p>					
教科書・参考書					
<p>各回のテーマに応じ、適宜紹介していく。</p>					
評価方法					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回の授業終了時のミニットペーパーの内容 30% ・ 授業への貢献度（ディスカッションへの参加度等）30% ・ 期末レポート 40% 					

その他の重要事項

オフィスアワーとともにメールでの指導を行う。

科目名	職業教育			科目コード	KLCE0109S
担当教員	川山 竜二			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	土曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	演習	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、現代社会における職業教育の総合的理解をはかり、履修者自身が専門職教育も含めた職業教育についての研究を進めることである。本授業ではとくに「専門職業人＝プロフェッション」と「専門職業人育成＝プロフェッショナル・スクール」についての社会的な布置について考究する。現代社会では高度専門職業人の育成が求められているが、AI等の科学技術の進展によって、専門職業人（プロフェッション）の役割は刻々との変容している。こうした社会構造の急速な変容に対応することができるような、これからの職業教育のあり方を、本授業では考究する。そのなかには、民間教育事業者も当然含まれる。企業が提供する certificate（たとえば、Microsoft や Google が提供する certificate を想定するとわかりやすい）と大学が提供する certificate にどのような相違があるのかといった点も検討する。

これまで体系的に議論されてこなかった専門職業人やそれに係る教育について、これを新たな教育ととらえ、どのように実装させていくのか。専門職業人教育に必要な要素とは何かを議論する。本授業の到達目標は、履修者が「専門職業人」とは何かを理解し、社会構造と教育全体の構造をとらえながら適切な専門職制度や certificate を構築できるようになることである。

授業計画

第1週（1講） インTRODクシヨン

授業の進め方と現在における職業教育および専門職教育の研究状況を概観する。

第2週（2・3講） 高等教育における専門職教育

これまでの産業教育学と職業教育学の知見を紐解きながら、高等教育における専門職教育の現状およびあり方について考究する。また、大学と専門職教育の関係性と certificate について言及する。

第3週（4・5講） プロフェッショナル・スクールの理論と実践

専門職教育機関とは一体いかなるものなのか、プロフェッショナル・スクールの諸研究を紐解き、専門職業教育の制度設計を実践する能力をみにつける。

第4週（6・7講） 日本におけるプロフェッショナル・スクールと職業教育思想

日本におけるプロフェッショナル・スクールと職業教育機関の制度設計思想について考究する。とりわけ、専門学校・専門職大学院・専門職大学を取り上げて検討する。

第5週（8・9講） MBA は専門職教育か

専門職業人教育の事例研究として MBA（経営修士）教育について取り上げる。汎用性の高い MBA が専門職となりうるのかを考究し、履修者とともに討議する。

第6週（10・11講） 専門職論の系譜と資格制度

職業教育のなかで、最終的な到達点である「専門職業人」について専門職論の系譜を読み解きながら、AI 台頭時代の専門職の在り方について論じる。くわえて、企業が提供する certificate と学位の certificate について比較しながらその機能について知識社会学的に検討する。

第7週（12・13講） 専門職業人養成研究

日本における専門職業人養成に関する政策および制度についての理解を深めるために、当該知見をもった実務家をゲスト講師として招聘し討論する。

第8週（14・15講） 総合討議

これからの専門職と専門職業教育はいかにあるべきか、現代社会における専門職教育の行方についてそれぞれ履修者の関心のある領域において口頭発表および討議をおこなう。

授業の進め方と方法

本授業は、2講目以降、2コマ（90分×2）連続で実施する。

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は担当教員によるディスカッションを中心に授業することを想定している。最終週の第8週では、口頭発表を行う。

授業外の課題

授業外の課題として、それぞれの履修者に与えられた課題への取り組み、必要な関連資料などの精読をおこなうこと。特に第8週のための発表準備は確実におこなうこと。

教科書・参考書

指定教科書なし。授業中に適宜、参考文献を紹介する。

- ・リチャード・サスカインド，2017，『プロフェッショナルの未来——AI、IoT時代に専門家が生き残る方法』朝日新聞出版。
- ・ドナルド・ショーン，2017，『省察的実践者の教育——プロフェッショナル・スクールの実践と理論』鳳書房。
- ・日本産業教育学会編，2013，『産業教育・職業教育学ハンドブック』大学教育出版。

評価方法

1. 授業ごとにその場でコメントを書く「ミニットペーパー」を提出する。コメントとは、自分自身の意見とそう考える理由・根拠のこと（60%）。
2. 最終授業回の口頭発表（40%）。

その他の重要事項

金曜日A週は、本履修生を優先したオフィスアワーとして設ける。本時間もふくめて、別の時間にオフィスアワーを求めるときはメールまたは学内のLMSで事前に予約すること。

科目名	実践と理論の融合			科目コード	ICPC0320S
担当教員	川山 竜二			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	土曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	演習	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、専門職大学院などの制度目的にも謳われている「実践と理論の融合」について理解し、それぞれの履修者が「実践と理論の融合」について自分なりの見解をもつことができるようになることである。そのために本授業では、「実践と理論の融合」にかかわる理論である「中範囲理論」や「反省理論」の概念の射程と限界について受講生とともに考究する。また、「実践の理論」の社会的役割とは何かを検討する。

したがって本授業の到達目標は、高度専門職業人の素養の一つである「理論と実践を架橋する」ことの意義について履修者なりの見解を持てるようになること。くわえて、自身の実務経験を体系化し「実践の理論」として実践知の結晶化をするための手段を体得するための技法について検討することを想定する。

授業計画

第1週（1講） イン트로ダクション 「専門職大学院と実践と理論の架橋」

本授業の授業計画について共有し、「実践と理論の融合」がどのような文脈で用いられているのかについて講義する。

第2週（2・3講） 「理論とは何か？実践とは何か？」

「実践と理論の融合」を考察するための基本的な概念定義を講義する。具体的には、《理論》、《実践》、《実践知》、《経験》、《経験知》などの用語をさまざまな専門分野の蓄積から立体的に理解する。

第3週（4・5講） 中範囲理論

「実践と理論の融合」を考察するために、《メタ理論》、《大理論》、《中範囲理論》、《実践理論》の違いについて考究する。とりわけ、「実践と理論の融合」に有用であると考えられる《中範囲理論》の考え方を実践の理論に応用できる可能性を探究する。

第4週（6・7講） 省察的实践とリフレクション（反省理論）

「実践と理論の融合」を履修生自身が実践できるように、「省察的实践」と「リフレクション」に焦点をあて講義する。自らの知見をどのようにして、体系化できるのかを検討する。

第5週（8・9講） 実践の理論

「実践と理論の融合」の一つの到達点である「実践の理論」について講究する。実践の理論とは何か、履修生それぞれが構築しようとする実践の理論とは何かを検討する。

第6週（10・11講） 実践と理論の往還

「実践と理論の融合」は、必ずしも実践の理論を作り出すことではない。プロフェッショナルの行為としての「実践と理論の融合」がいかなることかを考究する。

第7週（12・13講） 「理論と実践の融合」はいかにして可能か

現代社会において「理論と実践の融合」が専門職大学院も含めて求められている。現代社会における「理論と実践の融合」がいかにして可能となり、どのような役割がもとめられるのかを知識社会学や社会認識論（Social epistemology）の観点から議論する。

第8週（14・15講） 総合討議

それぞれの履修者の「実践の理論」がいかなるものかを報告し議論する。

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は担当教員による講義とディスカッションを交えて授業することを想定している。最終週の第8週では、口頭発表を行う。

授業外の課題

自身の経験の振り返りをするを習慣づけ、言語化することを心がけること。

教科書・参考書

指定教科書なし。授業中に適宜、参考文献を紹介する。

- ・ ドナルド・ショーン, 2007, 『省察的实践とは何か——プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房.
- ・ アンソニー・ギデンズ, 2000, 『社会学の新しい方法規準——理解社会学の共感的批判』 而立書房.

評価方法

1. 授業ごとにその場でコメントを書く「ミニットペーパー」を提出してもらう。コメントとは、自分自身の意見とそう考える理由・根拠のこと（60%）。
2. 2、最終授業回の口頭発表（40%）。

その他の重要事項

土曜日A週は、本履修生を優先したオフィスアワーとして設ける。本時間もふくめて、別の時間にオフィスアワーを求めるときはメールまたは学内のLMSで事前に予約すること。

科目名	学習社会論			科目コード	KLCE0111S
担当教員	富井 久義			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	火曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	演習	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

学習社会 (learning society) とは、生涯にわたって人びとがたえず学習することによって維持・発展される社会を指す。近年では、経済学者のジョセフ・E・スティグリッツがこの概念を用いて、経済成長における学習の重要性を説いているが、もともとは、1960 年代後半に元シカゴ大学学長のロバート・M・ハッチンスが提唱した概念である。ハッチンスはむしろ、経済活動に有為な人材育成のための教育という見方を批判的にとらえ、“人間が賢く、楽しく、健康に生きる”という“人生の真の価値”を助けるための継続的な教育の重要性を強調している。

本授業では、スティグリッツに代表されるような経済活動に資する人材育成という観点と、ハッチンスに代表されるような人材育成とは異なる視点から教育をとらえる観点という、異なる文脈で議論の展開される学習社会論を取り上げ、主要な概念に込められた意味や論者の立場を詳細に検討する。これをつうじて、学習社会をめぐる主要な概念や発想法を理解し、現代社会における学習の社会的位置づけについての受講者自身の見解を明確にしたうえで、受講者自身の教育や学習活動の現代社会における位置づけを論じられるようにすることが、本授業の目的である。

本授業の到達目標は、次の3つである。

- 1 学習社会論をめぐる主要な概念や発想法を理解し、説明できる。
- 2 現代社会における学習の社会的位置づけを、自身の見解を交えて論じられる。
- 3 自身が取り組む教育／学習活動の社会的位置づけを、学習社会論を踏まえて論じられる。

授業計画

第1週 (1 講)	: 学習社会とはなにかーイントロダクション	【講義】
第2週 (2・3 講)	: 『スティグリッツのラーニング・ソサイエティ』を読む①	【講読・討論】
第3週 (4・5 講)	: 『スティグリッツのラーニング・ソサイエティ』を読む②	【講読・討論】
第4週 (6・7 講)	: 学習社会論の系譜①経済成長と学習	【講義・討論】
第5週 (8・9 講)	: ハッチンス「学習社会」を読む	【講読・討論】
第6週 (10・11 講)	: 学習社会論の系譜②学習とユニバーサル・アクセス	【講義・討論】
第7週 (12・13 講)	: 来たるべき学習社会とはどのような社会か	【発表・討論】
第8週 (14・15 講)	: 受講者自身の教育／学習活動と学習社会ーまとめ	【発表・討論】

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講 (90分×2) 連続で実施する。

本授業は、受講者の発表ないし担当教員の解説と、それに基づくクラスでの討論をおこなう演習形式で授業を進める。第2・3・5週は、教科書に指定されている文献について、受講者が分担で報告を担当する。各文献の講読終了後の第4・6週は、担当教員が関連する議論についての講義をおこなう。第7・8週は、授業テーマに関して、受講者全員が発表をおこなう。

なお、毎回の授業終了時には、各回の学習内容と自身の意見・その根拠を記入する、ミニットペーパーの提

出を求める。	
授業外の課題	
授業で取り上げる箇所について、教科書をあらかじめ通読し、疑問点や意見をまとめておくこと。 また、発表担当者は、あらかじめ発表資料を作成すること。	
教科書・参考書	
<p>【教科書】*教科書は各自入手すること。入手の方法は初回に案内する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョセフ・E・スティグリッツ他, 2014=2017, 『スティグリッツのラーニング・ソサイエティ』東洋経済新報社. ・ロバート・M・ハッチンス, 1968=1979, 「学習社会」『現代のエスプリ 146 ラーニング・ソサイエティ』至文堂, 22-33. <p>【参考書】授業内で適宜紹介する。</p>	
評価方法	
・毎回の授業終了時のミニットペーパーの内容	40%
・授業への貢献度（文献講読の発表分担、ディスカッションへの参加度）	30%
・第7週・第8週での発表内容	30%
*具体的な評価基準は初回授業時に説明する。	
その他の重要事項	
相談等が必要な場合は、事前にメール等で連絡をすること。	

科目名	ナレッジ・マネジメント			科目コード	ICPB0208S
担当教員	田原祐子			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	水曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、人・組織・企業・社会に潜む、知恵やノウハウという「暗黙知」に気づき、それらを「形式知化」しながら組織～社会でスパイラルアップしていくという、ダイナミックでエキサイティングなプロセスを通じて、実践的ナレッジ・マネジメント（Knowledge Management）の導入・活用法を理解・修得することである。さらに、MA（Marketing Automation）・AI（人工知能）等、先端ビジネスの知識も取り入れ、ナレッジ・マネジメントを活用することで、新しい知恵やビジネスを創造する力を醸成する。

また、社会における知的資本経営の必要性と、企業価値創造における無形資産（インタンジブル・アセット）の重要性等を理解し、ナレッジを戦略的に活用する一方で、人材の流動化による知恵・知財の消滅・流出といった課題への対応法も同時に修得する。

本授業では、理論と実践を融合させるため、講師がコンサルティングの現場において 20 年以上、実際にナレッジ・マネジメントを手掛けた事例を取り上げ、また、履修者が直面している実際の課題等も取り上げ、自らの手で職場や社会に潜在している、暗黙知を形式知化していくことができるよう、再現性を重視した内容構成となっている。

本授業の到達目標は、履修者が、ナレッジ・マネジメントおよび、暗黙知の形式知化について理解・修得し、各自の研究・課題に活用・還元し、以下の状態に到達することを想定する。

- 1、ナレッジ・マネジメントの視座から、自らの研究に結びつく課題を発見し、解決に向けて探究する。
- 2、ナレッジ・マネジメントを活用して、社会における課題のひとつを取り上げ、解決案を提案する。
- 3、ナレッジ・知的資本を活用して、社会・業界における競争力を高める戦略を立案する。

授業計画

第 1 週（1 講）：ガイダンスおよびイントロダクション

キーワード：暗黙知と形式知、知的資本、企業価値創造、AI（人工知能）、MA（Marketing Automation）

第 2 週（2・3 講）：ナレッジ・マネジメントの理論とモデル

キーワード：SECI モデル、DIKW モデル、KW モデル、暗黙知を形式知化する 7 つの Step

第 3 週（4・5 講）：ケーススタディ ①エネルギー会社 ②介護施設 ③法律事務所 事例分析・検証

キーワード：新規事業、組織開発、チャンネル、クラスター、エコシステム、ビジネスモデル

第 4 週（6・7 講）：課題解決 ①営業 ②マーケティング ③設計開発 ④人材育成・開発

キーワード：SFA（Sales Forth Automation）、MA（Marketing Automation）、フレーム&ワーク

第 5 週（8・9 講）：実践課題・演習

キーワード：研究計画の概要と検討（各自の課題抽出～分析～仮説～導入計画）

第 6 週（10・11 講）：実践課題・演習

キーワード：中間報告（分析結果～仮説検証～導入計画、および手順の確認）

第 7 週（12・13 講）：実践課題・演習

キーワード：発表（プレゼンテーション～講評～ディスカッション）

第8週 (14・15講) : ナレッジ・マネジメントの仮想プロジェクト導入模擬体験

キーワード : 導入～実践～PDCA、定着支援、スパイラルアップ

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、毎回の講義を、講義・ディスカッション・ワークによって構成する。学んだ理論を、ビジネスの現場において実践・活用できるよう、実際に行われた事例・題材に基づいた、ケーススタディを取り入れて進める。

授業外の課題

授業外の課題として、毎回、授業の最初に「人材育成」にかかわるトピックス（情報・気づき・実践内容等）を履修者が持ち寄り、共有する時間を設ける。授業外の準備として、そのための準備を求める。また、プレゼンテーションの準備および最終レポート課題の完成に向けた作業を求める。

教科書・参考書

教科書なし。

参考書は下記の通り。

- ・マイケル・ポランニー，2003，『暗黙知の次元』筑摩書房。
- ・野中郁次郎，1996，『知識創造企業』東洋経済新報社。
- ・入山章栄，2019，『世界標準の経営理論』ダイヤモンド社。

その他、授業中に適宜参考図書を紹介する。

評価方法

- ① 毎回の授業で、履修者の意見と、そう考える理由を記した「ミニットペーパー」の提出を求める。
 - ② 毎回の授業で行う、ディスカッション・ワークへの参加度を評価する。
 - ③ 発表内容および、プレゼンテーションを評価する。
 - ④ 最終レポート課題（800字）の提出を求める。
- 以上、①（15%）②（25%）③（30%）④（30%）の総合評価により成績を評価する。

その他の重要事項

遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。

本授業に関する疑問点や不明点については、担当教員までお問合せください。

※ 本授業は、「広報・情報研究科」との共通科目である。

科目名	人材育成			科目コード	ICPB0208S
担当教員	田原祐子			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	月 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、人材に内在する限りない潜在能力を引き出して、モチベーション・エンゲージメント・知的生産性の高い自律型人材を企業内で育成するため、様々な人材育成理論および、具体的な育成手法を理解・修得することである。

「企業は人なり」という言葉が示すように、人材なくして事業は成り立たず、人材は企業にとって、かけがえのない貴重な資産（リソース）である。しかし、一方で、仕事に対する価値観やワークライフバランス等の考え方が多様化しており、人材育成や人事戦略も変革を求められている。また組織構造に関しても、従来のピラミッド型ではなく、ティール組織が注目されるといった時代の流れの中で、人材育成・人材開発の手法も大きく変化している。さらに、労働力人口が減少し慢性的な人材不足が続き、人材流動化が進む現状においては、「目の前の人材を、指導・育成・能力開発すること」が、企業の最重要課題である。そこで必要となるのは、人材を育てるしくみや方法や、人材が育つ環境整備であり、それを理解・修得することが、この授業のテーマである。

本授業の到達目標は、履修者が、大きな転換期を迎えている今の時代に合致した、実践的な人材育成理論・具体的な人材育成法・人事戦略を理解し、人材の育成と人材育成における課題解決のために活用できるスキルを習得することである。

授業計画

第1週（1講）：ガイダンスおよびイントロダクション

キーワード：組織・人事変革、メンバーシップ制 vs ジョブ制、WLB、ダイバーシティ

第2週（2・3講）：企業内教育訓練と人材育成 ～基本と実践法

キーワード：学習のメカニズム、学習モデル、学習環境デザイン、フレーム&ワークモジュール

第3週（4・5講）：人材の強みを活かす ① ヒューマン・リソース・マネジメント

キーワード：PM から HRM へ、コンピテンシー、タレントマネジメント、キャリア・アンカー

第4週（6・7講）：人材の強みを活かす ② キャリアコンサルティング

キーワード：キャリア開発、ゼネラリスト vs スペシャリスト、ジョブカード

第5週（8・9講）：人材を育てモチベーションを高める、「承認」と「評価」のしくみ

キーワード：動機づけの理論、承認欲求、人事考課、考課面談、報酬、MBO

第6週（10・11講）：組織開発・チームビルディング、変わるマネジメント

キーワード：ティール組織、フラット化、1on1 ミーティング、コーチング、リーダーシップ

第7週 (12・13講)：最新の人材育成戦略 および、最終発表の計画立案

キーワード：HRテクノロジー、HPI (Human Performance Improvement)、データ・ドリブン人事戦略

第8週 (14・15講)：発表～プレゼンテーション～講評 (自分が属する組織をモデルとする)

キーワード：強みを発揮しモチベーション高い人材を育てるための、戦略・マネジメント

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、毎回の講義を、講義・ディスカッション・ワークによって構成する。学んだ理論を、ビジネスの現場において実践・活用できるよう、実際に行われた事例・題材に基づいた、ケーススタディを取り入れて進める。

授業外の課題

授業外の課題として、毎回、授業の最初に「人材育成」にかかわるトピックス (情報・気づき・実践内容等) を履修者が持ち寄り、共有する時間を設ける。授業外の準備として、そのための事前準備を求める。

教科書・参考書

教科書は指定しない。

参考書は下記の通り。

- ・中原淳 (編著)・荒木淳子・北村士朗・長岡健・橋本論 (著), 2006, 『企業内人材育成入門』ダイヤモンド社.
- ・高橋俊介, 2012, 『人が育つ会社をつくる』日本経済新聞出版社.
- ・高橋俊介, 2004, 『ヒューマン・リソース・マネジメント』ダイヤモンド社.
- ・田原祐子, 2017, 『マネージャーは「人」を管理しないでください』秀和システム.

その他、授業中に適宜参考図書を紹介する。

評価方法

- ① 毎回の授業で、履修者の意見と、そう考える理由を記した「ミニットペーパー」の提出を求める。
- ② 毎回の授業で行う、ディスカッション・ワークへの参加度を評価する。
- ③ 発表内容および、プレゼンテーションを評価する。
- ④ 最終レポート課題 (800字) の提出を求める。

以上、① (15%) ② (25%) ③ (30%) ④ (30%) の総合評価により成績を評価する。

その他の重要事項

遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。

本授業に関する疑問点や不明点については、担当教員までお問合せください。

※ 本授業は、「広報・情報研究科」との共通科目である。

科目名	教育産業と教育事業			科目コード	KLCE0114L
担当教員	廣政 愁一			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	水曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、履修者が「教育産業」の現状を理解し、「教育事業」の特殊性についての知見を深めることにある。本授業では、多様なアクターが参画する教育産業の歴史的展開と社会の変化により実施されてきた具体的な教育産業について体系的に教授する。これまでの歴史を紐解けば教育産業や教育事業は、採算を度外視した公益性を求められるきらいもあった。しかし、教育も一つの事業であるならば、その事業体で収益性を確保しつつ、公益性に応えなければならない。こうした教育事業特有の事情について、実務的な視座から授業をする。

本授業の到達目標は、履修者が「教育産業と教育事業」についての基本的な知見を習得し、履修者が取り組む既存の教育事業をアップデートすることや、新たな教育事業をデザインするための基礎的な能力を習得することにある。

授業計画

第1週（1講） オリエンテーション 「教育産業・教育事業は教育が主か否か」

授業の進め方と授業計画の確認を行う。あわせて教育産業・教育事業についての概論を講義する。

第2週（2・3講） 教育と教育産業の全体と歴史

教育の歴史を振り返り、公益性から徐々に産業へ広がっていく過程を「教育と社会の関係性」から講義する。あわせて、教育産業の政治的背景も見ていく。

第3週（4・5講） 教育事業の変遷（1）——イノベーションから衰退までの過程

日本においてはさまざまな教育事業が生まれたが、その歴史はイノベーションと衰退を繰り返しているにすぎない。なぜ、イノベーションが生まれたのか、そして、どうして衰退していったのかをケーススタディをもとにして解き明かしていく。履修者がなぜ、どうして、の視点を持てるように講義する。

第4週（6・7講） 教育事業の変遷（2）——イノベーションから衰退までの過程

前回に続き、豊富なケーススタディを扱って講義する。前回の基本的なイノベーションから衰退までの知識を前提に、さらにハイプサイクルを使ってビジネスとしてどのように対応すべきかを考える。

第5週（8・9講） 教育産業と教育聖域の功罪——教育は保守であるべきか革新であるべきか

学校教育をはじめとして教育には特殊性が存在する。その特殊性はどこから生まれ、どのような功罪があるかを言及する。教育の「聖域」の功罪を理解してはじめて教育全体の動きがつかめる。分かりやすい事例を出しながら、現状の教育産業のできる範囲を明解にしていく。

第6週（10・11講） ICTの力は教育産業をどこへ向かわせるのか

教育現場では一気に ICT の風が吹いてきている。しかし、その風はどこから吹いてきて、どんな意図で吹いているのか。社会の要請なのか、政治の要請なのか、それとも教育的観点からなのか。現状の ICT 教育を点検していく。

第7週（12・13講） 新規教育事業をデザインして革新を起こすことは可能なのか

近年、ITの発達で教育もアイデアさえあれば、事業を興すことが容易になってきた。だからこそ、取るに足らない事業の乱立で教育を混乱させている現状もある。そんな教育の混沌のなかで、王道を走る革新に迫る事業を創造する可能性を考える。

第8週（14・15講） 総括討論

これまでの授業をまとめるとともに、履修生に対して現代社会における民間教育の役割とは何かを考え、口頭発表を課す。

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は担当教員による講義とディスカッションを交えて授業することを想定している。最終週の第8週では、口頭発表を行う。

授業外の課題

授業外の課題として、それぞれの履修者に与えられた課題への取り組み、必要な関連資料などの精読を行うこと。特に第8週のための発表準備は確実に行うこと。

教科書・参考書

指定教科書なし。授業中に適宜、参考文献を紹介する。

- ・学習塾白書編集委員会監修，2019，『学習塾白書』株式会社私塾界。
- ・中室牧子，2015，『学力の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

評価方法

- 1、その場でコメントを書く「ミニットペーパー」を提出してもらう。コメントとは、自分自身の意見とそう考える理由・根拠のこと（60%）。
- 2、最終授業回の口頭発表（40%）。

その他の重要事項

必要に応じて、授業時間外での相談に応じる。

科目名	現代の教育事情__教育サービスの現状と未来			科目コード	KLCE0115L
担当教員	山田 未知之			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	前期	曜日	火曜 A
年間開講数	1 回	授業の方法	講義	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、学習塾・予備校をはじめとする民間の教育サービスのこれまでのあゆみを振り返りながら、業界全体の実状を把握するとともに、これから先5年後（2025年）、10年後（2030年）、30年後（2050年）に求められる教育サービスとは何かを考えていく。そのため、授業には現場の第一線で活躍する複数の実務家をゲスト講師として招聘し、担当教員との対談を交えて最先端の知見を紹介するとともに、今後の教育サービスのあるべき姿について、履修者とディスカッションする時間を設ける。

本授業の到達目標は、教育サービスの本質を理解し、激しい社会変化に柔軟に対応しながら、時代ごとに求められるサービスをどのように変化させていくべきかを考えられる素養を身につけることである。

授業計画

第1週（1講）：教育サービスの変遷

キーワード：学習塾、予備校、受験、教育改革

第2週（2・3講）：学習塾の市場分析

キーワード：少子化、通塾率、ICT

第3週（4・5講）：教育サービスの新規事業（ゲスト講師）

ゲスト講師：やる気スイッチグループ 高橋 直司社長

キーワード：幼児教育、学童保育、介護

第4週（6・7講）：情報技術の進化と授業法の変化（ゲスト講師）

ゲスト講師：atama plus 稲田 大輔 CEO

キーワード：映像授業、アダプティブラーニング、遠隔授業

第5週（8・9講）：公教育と教育サービス

キーワード：学習指導要領、学校、学習支援

第6週（10・11講）：現行の教育サービスの課題

キーワード：クオリティコントロール、危機管理、海外進出

第7週（12・13講）：次代の教育サービスⅠ（ゲスト講師）

ゲスト講師：メイツ 遠藤 尚範社長

キーワード：Society5.0、リカレント、5G

第8週（14・15講）：次代の教育サービスⅡ（ゲスト講師）

ゲスト講師：a.school 岩田 拓真代表

キーワード：グローバル、探究型、学際

授業の進め方と方法

本授業は、第2週目以降、2講（90分×2）連続で実施する。

<p>上記授業の目的・到達目標を達成するため、本授業は、毎回の授業を講義とディスカッションにより構成する。</p>
<p>授業外の課題</p> <p>毎回、授業の最初に「教育サービス」に関わるトピックス（ニュースなど）を履修者が持ち寄り、共有する時間を設ける。授業外の課題として、そのための準備を求める。</p>
<p>教科書・参考書</p> <p>教科書は使用しない。</p> <p>参考書は、2回目の授業で読書案内を配布する。また、授業中に適宜参考図書を紹介する。</p>
<p>評価方法</p> <p>① 毎回の授業で、履修者の意見とそう考える理由を記した「ミニットペーパー」の提出を求める。</p> <p>② 毎回の授業で行うディスカッションへの参加度を評価する。</p> <p>③ 小レポート課題の提出を求める。</p> <p>以上、①（50%）、②（30%）、③（20%）の総合評価により成績を評価する。</p>
<p>その他の重要事項</p> <p>遅刻や欠席をする場合は、学内のLMS（学習管理システム）などを通じて事前に連絡すること。</p>

科目名	教育コンテンツ開発			科目コード	KLCE0116S
担当教員	廣政 愁一			単位	2 単位
配当年次	—	実施学期	後期	曜日	水曜 B
年間開講数	1 回	授業の方法	演習	必修・選択の別	選択

授業概要（目的・到達目標）

本授業の目的は、履修者が知識を社会へと効果的に普及する新たな「教育コンテンツ」を構想するための能力を身につけることにある。教育事業や新たなスクール運営を立ち上げようとするならば、マネジメントなどの運営のみならず、何を教えようとするのか教育コンテンツや学習サービスの設計が必要となる。

上記目標を達成するため、本授業では、塾や予備校、ビジネススクール、あるいは教育ベンチャーや人材研修といった主体についての学習サービスの設計を通じて、持続可能な教育コンテンツがどのような条件で実現できるのか、検討する。

本授業の到達目標は、履修者が現代社会から生じる教育への需要を満たすことのできる「教育コンテンツ」をつくり出すことである。

授業計画

第1週（1講） オリエンテーション

授業の進め方と授業計画の確認を行う。あわせて教育ビジネスについての概論を講義する。

第2週（2・3講） 教育事業の全体像概観

現在の教育事業にどのようなものがあるかを検証し、それぞれの教育事業分野がどの程度成長していく可能性があるのか、それとも飽和、あるいは衰退しているのかを議論していく。その中で、経営でもっとも大切な教育ビジネスの勘所を鍛える。

第3週（4・5講） 教育ベンチャーの現状（1）——マーケットの限界とその規模

日本においてさまざまな教育ベンチャーが生まれてきているが、成功事例を見ながら、なぜ成功したのかを議論する。マーケティングの成功なのか、事業構造の強さなのか、マネジメントなのか。同様な成功の数々を見ながら共通項を探求する。

第4週（6・7講） 教育ベンチャーの現状（2）——マーケットの可能性とその規模

前回に続き、豊富なケーススタディを紹介し、解説する。日本においてさまざまな教育ベンチャーが生まれてきているが、前回とは反対に失敗事例を見ながら、どうして失敗したのかを議論する。マーケティングの失敗なのか、事業構造の弱さなのか、マネジメントなのか。同様な失敗の数々を見ながら共通項を探求する。

第5週（8・9講） 教育業界でのマーケティング——顧客はだれなのか

教育ビジネスの中でもっとも大切なことは「顧客の対象」である。B to B なのか B to C なのかあるいは B to B to C なのか。また、塾や予備校の顧客ははたして誰なのかを議論していく。その議論は顧客を明解にした戦略を生み出す元となる。

第6週（10・11講） 教育コンテンツ開発——経営戦略の基本に当てはめる

教育もビジネスに変わりはない。そこで経営戦略の王道である PEST 分析を学んでいく。履修者が考案する教育コンテンツを P=Political（政治面）、E=Economic（経済面）、S=Social（社会・文化・ライフ

<p>スタイル面)、T=Technological (技術面) から検証していく。</p> <p>第7週 (12・13 講) 教育コンテンツの設計—骨太な事業計画の作り方</p> <p>履修者が独自に開発する教育コンテンツをつくる際の「ヒト・モノ・カネ」を検証し、現実的なものにすることを教授する。</p> <p>第8週 (14・15 講) 総括討論</p> <p>これまでの授業をまとめるとともに、履修生に対して独自の新規の教育コンテンツの口頭発表を課す。</p>
<p>授業の進め方と方法</p> <p>本授業は、第2週目以降、2講 (90分×2) 連続で実施する。</p> <p>上記目的・到達目標を達成するため、本授業は担当教員による講義とディスカッションを交えて授業することを想定している。最終週の第8週では、口頭発表を行う。</p>
<p>授業外の課題</p> <p>授業外の課題として、それぞれの履修者に与えられた課題への取り組み、必要な関連資料などの精読を行うこと。特に第8週のための発表準備は確実に行うこと。</p>
<p>教科書・参考書</p> <p>指定教科書なし。授業中に適宜、下記のほか参考文献を紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習塾白書編集委員会監修, 2019, 『学習塾白書』株式会社私塾界. ・ 中室牧子, 2015, 『学力の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン. ・ 田所雅之, 2017, 『起業の科学』日経B P.
<p>評価方法</p> <p>1、授業ごとにその場でコメントを書く「ミニットペーパー」を提出してもらう。コメントとは、自分自身の意見とそう考える理由・根拠のこと (60%)。</p> <p>2、最終授業回の口頭発表 (40%)。</p>
<p>その他の重要事項</p> <p>必要に応じて授業時間外での相談に応じる。</p>